

# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



佐伯祐三  
（フ・クロッシユ）  
一九二七（昭和二）年  
キャンヴァス、油彩  
五二・五×六四・〇cm

本作品は、二度目のフランス滞在期の作品。冷たく湿った石造りの街並み、壁に静かに記された「LA CLOCHE」（「鐘」の意）の文字。

佐伯は、ヴラマンクに「このアカデミズム!!」と喝されて以来、自らの油彩画を模索し続けてきた。壁面を激しくうごめいているポスターや広告の文字は、生命の躍動を感じさせる。また厚い壁によって遮断された空間は、佐伯が見出した独自の空間構成である。

裏面には「フランス パリ/サンミッシェルの辺/一九二七年/米子識」（米子は、妻の佐伯米子）というラベルが貼付されていることから、一九五二年に開催された「佐伯祐三展」（神奈川県立近代美術館）では、本作は《サン・ミッシェルの町》と題されていたが、一九七八年の「没後五〇年記念 佐伯祐三展」（東京国立近代美術館他）からは、現在の題名に改題されている。しかし、現在の調査では、改題の理由は分かっていない。

（上席学芸員 泰井 良）

No.  
147  
2022年度 | 秋 |

# 歓迎 鴻池朋子さん御一行

館長 木下直之

兵馬備たちが二ヶ月半に及んだ滞在を終えて館を去り、少し寂しくなりました<sup>\*1</sup>。故郷へ帰ったのではなく、名古屋への移動です。身体が硬くて新幹線の椅子には座れないので、トラックに揺られて行きました。さらに東京での公開も予定されていますから、秦の始皇帝陵のそばに戻るのはまだまだ先の話です。

代わって江戸時代の日本から、大勢の画家たちがやって来ました<sup>\*2</sup>。いずれも富士や伊豆の風景に魅せられ、この土地を歩いた人ばかりですから、世話がかからない。全員が故人ゆえ、残された絵と向き合うだけなのです。

ところがそのあとには、久しぶりに生きた人が投宿予定<sup>\*3</sup>です。言い忘れましたが、今回は館長・館主、すなわち旅館の主人になり切っています。美術館という旅館は、古今東西からさまざまな旅人が訪れ、しばらく滞在しては立ち去って行くという不思議な場所なのです。

民俗学に「まれびと」という言葉があります。異界からやって来て、私たちの暮らしを活性化する人たち、いや神々かもしれない。当館は開館四十周年に向けて五カ年計画を公表しました(当館ウェブサイト参照)。「まれびと」に宿を提供することで、そこに掲げた基本理念「多種多様な美術表現を体験し、新たな価値と出会い、考え、理解し合う場」を実現させようと考えています。

さて、新たな客人に宿帳への記入を求めたところ、宿泊者の欄に「鴻池朋子ほか二百五十余人」と書かれびっくりしました。お泊まりは鴻池朋子さんおひとりとはばかり思っていましたから。

遠く熊本は国立療養所菊池恵楓園の金陽会メンバー十人、秋田は阿仁合という町の手芸グループの優に二百人を超える女性たち、それに加えて三人の旅館従業員(美術館学芸員)が鴻池朋子展の中に雪崩れ込んでいます。鴻池朋子プロデュース、という表現が適切か

もしれません。しかし、鴻池さんとは明らかに別人の手になるものがなぜ鴻池朋子展の一部なのか、それが問題です。

金陽会はハンセン病患者による絵画グループです。療養所という隔離された世界(かつては「絶対隔離」かつ「生涯隔離」でした)で生まれたがゆえに広がる想像力に鴻池さんの仕事共鳴しています。

秋田の女性たちから秋田の言葉で聞かされたそれぞれの悲しい話、怖かった話を、同じ秋田生まれの鴻池さんが瞬時に絵にすると、今度はそれを彼女たちが布を縫ってランチョンマットに仕立てた合作が「物語るテーブルランナー」です。見るより聞く、その前に語る、そして出来上がったものを見てまた語るといふ、沈黙と凝視が求められがちな美術館には異質な展示物です。

鴻池さんが学芸員に当館のコレクションから絵を選ばせたのは、コレクションを通して、そのようなものを蓄積する美術館を捉え直したいという思い

があるからです。館主である私もその思いを共有しており、だからこそ、ここでは旅館になぞらえてみたのです。

こんなふうには他者をぐいぐい巻き込む鴻池さんご自身が、他者からは自明のごとく「作家」、「芸術家」、「アーティスト」と呼ばれても、そう呼ばれる自分は誰なのか、どこまでが私なのかという問いをお持ちのようです。「絵に実感がでるなら誰の力でも、誰の力を借りてもいいんですよ」とまで言い切ります(『どうぶつのことば』羽鳥書店)。

誰にも私という意識があり、それに対応する身体、とりわけ顔、ついで外形、皮膚で覆われたものが自分だと信じて疑わない。しかし、その内側、内臓にまで意識はなかなか届かない。鴻池さんは、ものづくりを通して、この問題にも果敢に挑んでいます。

来る十一月六日、当館大広間(講堂)にて、鴻池朋子さんに面と向かい「いったいどこまでが鴻池朋子なのか?」と問いかけるつもりです。

\*1「兵馬備と古代中国〜秦漢文明の遺産」展、六月一八日〜八月二八日

\*2「絶景を描く〜江戸時代の風景表現」展、九月一〇日〜一〇月二三日

\*3「みる誕生〜鴻池朋子展」一一月三日〜一月九日

# リレー展「みる誕生」の始まりは瀬戸内の波打ち際から

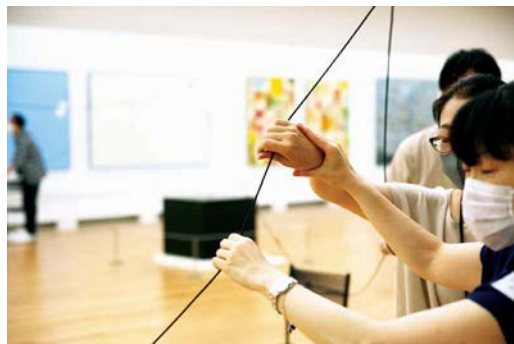
高松市美術館学芸員 毛利直子

個展「根源的暴力」以降、この荒ぶるエネルギーに満ちた作家鴻池朋子といつか一緒に仕事がしたいと思いを強くした。そして、瀬戸内国際芸術祭2019（以下、瀬戸芸）の参加作家となった彼女に高松での個展開催を依頼し、静岡県立美術館と青森県立美術館が仲間となってくれた。

わたしたちはそれを「リレー展」と呼ぶことになった。行く先々の地勢や美術館の個性を活かし、対話を重んじ



高松市美術館での展示風景 2022年



「みる誕生会」より 2022年 撮影：永禮賢

る鴻池と各学芸員たちが美術館システムへの違和感や課題に向き合い、長いスパンで美術館の可能性を探るからだ。その一つ「コレクションとは何か」を考えるために、鴻池は本展の核に美術館の収蔵品を組み込み、三館の学芸員に各自が特に基準なく作品を選ぶようリクエストした。展示した作品のキヤプション情報はタイトルのみで、作家名等はない。観客は誰のものとも分からない作品にばったり出会うのだ。

また人間以外の痕跡としての《動物の糞模型》も見落としてはしないだろう。自然の中で分解され大地の恵みの循環の中で次の命を繋いでいる糞との遭遇は、各人

が持つ美術（館）への固定観念を幾らか壊してくれたかもしれない。

また、瀬戸芸2022〈夏会期〉の連携として国立療養所大島青松園がある大島と本展で、国立療養所菊池恵楓園（熊本県）絵画クラブ「金陽会」の作品群を展示した。鴻池は自らの個展に組み入れることで「ハンセン病の」というレッテルを脇に置き、観客を「作品」に出会わせた。展示室から外へと繋ぐこの部屋は『インタータイダル・ゾーン（潮間帯）』と名付けられ、大島での新作《逃走階段》のインスピレーションの元となった若林奮の《緑の森の一角獣座 模型》や、鴻池が旅の先々で人々から聞いた物語を手芸作品にした《物語るテーブルランナー》も展示され、他人の出来事や人生が波のように寄せては返していた。

そして、ガラス天井から自然光が降り注ぐエントランスホールには、新作《高松 皮トンビ》と共に、前回の瀬戸芸2019で風雨に耐えた《大島皮

トンビ》や複数の風が飛び、いや、パラシュートで舞い降りたのだろうか、鴻池は人間以外のものたちを美術館に招き入れた。そして、道しるべとして、《高松 皮トンビ》から伸びる、行き黒い「ロープ」と帰りの「指くさり編み毛糸」を全館に巡らした。見えない人も見える人もそれを伝えることで視覚以外の感覚を開き、それぞれの「みる」が誕生したことだろう。

関連イベントも多岐に富んだ。「金陽会」作品の展示等に奔走する蔵座江美氏や糞土師の伊沢正名氏との作家トーク、見えない人と共に「みる誕生会」、また聾者の歴史学者である木下知威氏と鴻池の「筆談ダンス」では障害者というカテゴリーの解体にまで話が及ぶなど、一つとして同じでない身体の人々が鴻池を触媒に集い語り合う場があちこちに生まれていた。

始まりの高松から静岡へ何がリレーされ、どんな枝葉が伸びるだろうか。静岡では新たに《アースペイビー》が光と音を放っているはずだ。周りには豊かな森もあり、鴻池が新しい招き入れや抜け道を作るのを楽しみに思う。

## みる誕生 鴻池朋子展

2022年11月3日(木・祝)～

2023年1月9日(月・祝)

はじめ、いくつかの縁が重なり、今年度、鴻池朋子の個展を静岡県立美術館で開催する運びとなりました。

鴻池朋子は、アニメーション、絵画、絵本、彫刻などから手芸、おとぎ話、歌まで、あらゆる身近なメディアを用い、旅をして地形や季節と共に作品をつくり、作家活動の始まりから一貫して芸術の根源的な問い直しを続けてきました。二〇二〇年にアーティゾン美術館で開催された個展「ちゅうがえり」では、会場を入るとすぐの大きな空間に、襖絵がその周りを取り囲むようにして、背の高い滑り台が設置されていました。美術館の展示室に本来あるはずのない急傾斜の滑り台を滑り、展示室の上部空間から下部空間へと身体と視線を移動する行為は、想定していた美術鑑賞の範疇を大きく超えており、筆者自身、滑り台を滑り終えた頃にはそこが美術館の展示室内であるということすら分からなくなる感覚を味わったことを覚えています。鴻池はこの展覧会で、視覚以外の感覚を用いて作品と出会うことができる仕掛けを展覧会場の随所に設けて、美術館という場の意味や機能を根本から問い直しました。

そこから約二年、その間、高松市美術館、静岡県立美術館、青森県立美術



鴻池朋子《アースベイビー》2009

館の三館をリレーする新たな個展の準備が作家と三館の学芸員と共に進められてきました。展覧会は「みる誕生」と名付けられ、今年七月に最初の会場となる高松市美術館で展覧会が開幕しました。高松会場の様子は、本紙三ページに掲載の毛利直子氏の寄稿文をお読みいただくとして、展覧会場では、

従来の美術館の仕組みから観客を解放するさまざまな取り組みを発展させる試みが行われました。そしていよいよ秋に、展覧会はリレーのバトンを引き継いで静岡県立美術館へと会場を移します。アーティゾンという生き物も、美術館のコレクションという物も、時間や土地や風景とともに変化していくように、展示の構成も変化します。エ



美術館の裏山の風景

ントランスホールでは、アースベイビーが来館者を出迎え、美術館の周辺に広がる裏山を、抜け道と見立て、人間がこれまで築き上げてきた美術館というシステムをほんの少し開く試みを行います。ぜひここ静岡県立美術館で、リレーの途中経過を見届けていただければ幸いです。

(上席学芸員 川谷承子)

鴻池朋子 Tomoko Konoke

主な個展 二〇一五～二〇一七年「根源的暴力」  
 神奈川県立ホールほか二会場 二〇一六年芸術  
 選奨文部科学大臣賞受賞、「ハンターギャザラ  
 ー」秋田県立近代美術館、二〇二〇年「ちゅう  
 がえり」アーティゾン美術館(二〇二二年毎日  
 芸術賞受賞) 他、一九六〇年秋田県生まれ。

二〇一七年に当館で開催した「アートのなぞなぞ 高橋コレクション」展で、コレクターの高橋龍太郎氏が所蔵する鴻池朋子の《皮綴帳》を当館で展示する機会がありました。《皮綴帳》(二〇一五年)は、鴻池が東日本大震災後に出会った様々な想像力を結集し、クレヨンや水彩で描いた牛皮を縫い合わせた縦六m、横二四mの綴帳です。読者の中には、外光が差し込む美術館のエントランスホールで、天井から吊り下げられた巨大な綴帳の下をくぐり抜けて美術館の内部空間に進んだ事を思い浮かべている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。この作品の展示を

# 《輞川図巻》修理後初公開 静岡県・浙江省友好提携40周年記念 輞川図と蘭亭曲水図

2022年11月22日(火)～2023年1月9日(月・祝)

模刻した石刻本に基づいていますが、十六世紀に蘇州で活躍した仇英の画風からの影響が認められ、鮮やかな色彩や緻密な描写が見どころです。本作のような、石刻本に基づく、着色の肉筆で描かれた輞川図巻は、シアトル美術館本や長崎・聖福寺旧蔵本が知られていましたが、世界中で数多く見出されているわけではありません。

《輞川図巻》が制作された時代の蘇州では、《輞川図巻》のような、古典名画を模した作品が大量に制作されており、それらは「蘇州片」と呼ばれています。本展では、《輞川図巻》とともに、当時の蘇州片の大作をはじめ、明代蘇州で制作された優品をご紹介します。

また、静岡県・浙江省友好提携40周年を記念して、浙江省にある蘭亭に注目し、王羲之が蘭亭に文士四十一人を集めて修禊を行った故事を描いた「蘭亭曲水図」を特集します。展示では、重要文化財・池大雅《蘭亭曲水図屏風》(当館蔵)など、江戸時代の大作三点を並べることで、蘭亭曲水図のさまざまな表現をご紹介します。

本展に併せ、《蘭亭曲水図屏風》の作者である狩野永納、久隅守景、池大雅の優品、関連作品を展示します。いずれも厳選した優品ですが、なかでも、

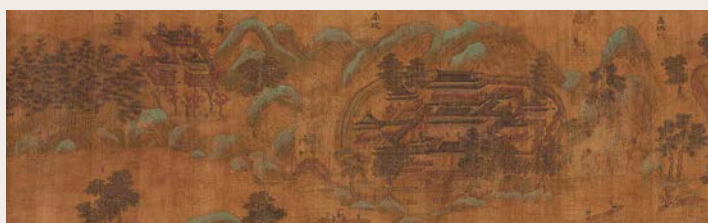


図1 《輞川図巻》(当館蔵) (部分)



図2 伝文徵明《瀟湘八景図巻》(個人蔵) (部分)



図3 池大雅《蘭亭曲水図屏風》(当館蔵)

大雅の作品では、中国の理想的な景観を描く作品から、日本の名勝を描く際、中国の画家による作品のイメージを重ねることで、景観描写を理想化することを試みた作品へと展開する風景表現をご覧ください。中国の理想的な風景を連想し、日本の名勝を描くに至る大雅の試行錯誤にご注目ください。

初公開作品や、長らく展覧会でご覧いただくことなかった作品を含みます。ぜひ、この機会に会場にお運びください。

なお、本展に併せ、板倉聖哲氏(東

京大学教授)、植松瑞希氏(東京国立博物館研究員)、呉孟晋氏(京都大学准教授)、佐藤康宏氏(東京大学名誉教授)、塚本磨充氏(東京大学教授)、横尾拓真氏(名古屋博物館学芸員)(五十音順)をお呼びする、超豪華メンバーによるシンポジウムを十二月三日(土)に開催します。ぜひ、この機会に奮ってご参加ください。

(詳しくは当館HPをご覧ください  
<https://spm.oa.shizuoka-shizuoka.jp/program/detail/619>)

(上席学芸員 野田麻美)

本展は、二〇一八年に収蔵された《輞川図巻》の三年にわたる修理が終了したことを記念し、《輞川図巻》の全巻初公開を行う展覧会です。「輞川図」は、唐代の詩人・画家である王維が営んだ輞川荘を自らが描いたという故事に基づく主題で、中国や日本など、東アジアで幅広く人気を博し、盛んに描かれるようになりました。

このたび初公開する《輞川図巻》は、北宋の画家・郭忠恕が描いた輞川図を

## 資料紹介

## ジョヴァンニ・ピエトロ・ピナローリ

## 『現存する、古今ローマの最も記念すべき事柄の論文』について

上席学芸員 南 美幸

当館所蔵のジョヴァンニ・ピエトロ・ピナローリによる『現存する、古今ローマの最も記念すべき事柄の論文』(一七二五年)は、ローマ建国者とされるロムルスに関する伝説から筆を起し、古代ローマ王政期の王たちなど歴史上の人物や、都市ローマの名所旧跡に関する解説および版画を収載した古今のローマに関する研究書である。本書は一七〇〇年の初版から一七二五年の第四版まで、タイトルや内容、ポリウムを変えて版を重ねた<sup>2)</sup>。各版と作者については後述するが、一七二五年刊行の第四版と思われる当館所蔵本は、第二版より大きくヴァージョン・アップした第三版をさらに拡充させた内容であるだけでなく、第一版から第三版までの作者とは名前が異なる点が目引く。本小論では、第一版から第四版までの変遷および当館所蔵本第四版の特徴と、古代研究における本書の位置づけについて考察する。

まずは作者について。第一版から第三版までの作者名はジャコモ・ピナローロである。第三版扉の「ミラノ人ジャコモ・ピナローロ」という記述から、ミラノ出身であることが判明する。一方第四版扉には「アルカディアの間で Pasiro と呼ばれるジョヴァンニ・ピエトロ・ピナローリ」と記されている。ジャコモ・ピナローロとジョヴァンニ・ピエトロ・ピナローリは恐らく親戚関係にあると、バルビエリは示唆する。ジョヴァンニの身元を示す手がかりとなる第四版扉中の「アルカディア」の語は、

十七世紀終わりにローマで設立された文学アカデミーであるアカデミア・デラルカディア会員の意と推測される。と言うのも、本書第一版と第二版の版元であるローマのアントニオ・デ・ロッシは「アカデミア・デラルカディアのために、ほぼ公式の出版者」と見なされるほど多くの仕事をした人物と指摘されており、デ・ロッシとジャコモ、そして恐らくジャコモとジョヴァンニの関係から、ジョヴァンニと同アカデミア会員とのつながりだけでなく、ジョヴァンニ自身がアカデミアに入会した可能性も考えられるからである<sup>5)</sup>。

次に各版について。上述のとおり、初版(一七〇〇年)および第二版(一七〇三年)はともにローマのアントニオ・デ・ロッシから刊行された。ふたつの版のタイトルは異なり、何れも実見できていないものの、同じ版元からの刊行であることから、内容にほぼ異同はないと推測される。

一七一三年に刊行された第三版は、第二版とは大きく様変わりする。古今のローマのモニユメントの解説にローマ郊外やローマを流れる川の記述も加わるなど、内容の追加や充実が図られ、ポリウムも格段に増える。解説にはローマのバシリカやサン・ルイージ教会に関する書物を著したジョヴァンニ・バッティスタ・ヴァッコンディオ(Giovanni Battista VACCONDIO)の註釈が追記され、聖職者フランチェスコ・ピリーニ(Francesco PIRRI)に献呈された第三版は、ガエタノ・カプラーニカに変更して

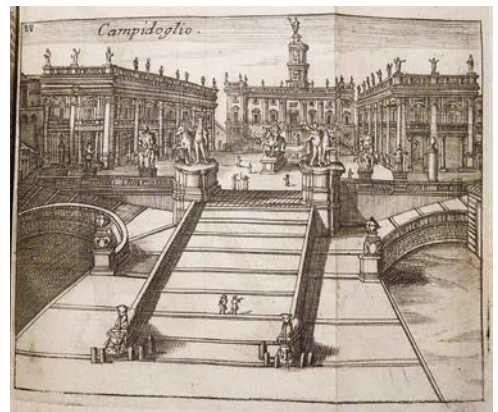


図1 《カンピドリーオ広場》

出版された。

続く第四版は、第三版をもとに下記の五つの要素が加わる。まず、それまでの伊語のみの表記から仏語とのバイリンガルになった点。ジョヴァンニは序文において、この変更目的を次のように説明する。「貴族的な好み为满足させるために、仏語の翻訳でこれを提示する。それは物見遊山で訪れた外国人にも少なからず慰めになるだろう」。このようなグラントツアー客への配慮には、私人協力者の存在が考えられるが、具体的な人物は判明していない。第二の変更は、何と言っても図版の追加である(図1)。第四版は三巻本から成り、第一巻に二六図、第二巻に二一図、第三巻に十九図の計六六図が掲載され、その大部分が古今のローマのモニユメントを描く。素描家、版画家の署名はなく、非常に素朴な表現だが、言葉だけではなく視覚表現が加わったことは非常に大

さい転換点であると言えよう。第三の変更は、伊語および仏語のインデックスと正誤表が各巻に加わった点で、読者への配慮と正確さを期する、現代の書物にも通じる姿勢は、当時の著作としては珍しいと言えるだろう。第四の変更は信者に特別の赦しを与えられる二五年ごとの聖年に関する記述の追加、最後の変更は第三巻最後に付された古代の貨幣に関する資料の追加である。6 教皇庁の書記庁書記官アントニオ・バンキエーリ (Antonio BANCHIERI) 宛の書簡形式で記された後者の資料は、古代研究の一分野として展開したルネサンス以来の伝統である古銭収集趣味や古銭学を物語る。7 初版からわずか三年で再版されたことから、本書は刊行当初から評判を呼び、人気があったと思われる。この背景には、古代の遺構や遺物研究の系譜の中で、古今のローマというテーマが十八世紀初頭には目新しいものだったということが考えられるのではないだろうか。この点に関し、フォルミカは本書のデ・ロッシ版(第一・二版)について次のように述べる。「考古学的・歴史的研究の出版物は、(略) もはや学問的思索の対象として見られるだけでなく、現在との結びつきにおいても研究される、過去に対する新たな感性の兆候」であり、「過去と現在の関係についての新たな考え方は、その後、自らの環境へと注意を向けさせるに至った。すなわち、ローマについての研究は、正確に規定された個別の側面へと移行したのであり、都市ないし建築的

なものについてであれ、自然についてもであれ、彼の編纂した著書の中にある一覽の中に証拠を見つけることができるものだった」。十八世紀初めに刊行された本書は、この分野においてかなり初期の作例と言えるだろう。そして第三版での内容の追加と充実も着目すべき点だが、特に第四版での大規模な変更と追加は、執筆者による古今時代のローマ研究の成果としてのひとつの決着点を示すのみならず、こうしたテーマの著作に対する当時の出版社や読者の意向および希望を汲んだものと推測され、興味深い。また第四版での貨幣に関する資料の追加は、新しいテーマだけでなく、伝統的な古代研究への目配りも忘れてはいない姿勢を表すものと思われる。このように、ジョヴァンニ・ビエトロ・ピナローリの「現存する、古今ローマの最も記念すべき事柄の論文」は、十八世紀の古代研究において少し目先を変えた著作として位置づけられる。

1 1725. Giovanni Pietro PINAROLI. *Trattato delle cose più memorabili di Roma tanto antiche come moderne, che in esse di presente si trovano. Aggiuntivi le Spiegazioni de' Bassi Rilievi, e Inscrizioni colla notizia delle Chiese, Palazzi, Giardini, e Statue che l'adornano, colle principali funzioni Sacre. Solite a far si dal Sommo Pontefice. I diparti di Frascati, Tivoli, Albano, Marino, Velletri, e Capranica, e quanto di Antico in esse s'osserva. L'Origine dei fiumi Tevere, & Aniene, e di tutte le acque che sono in Roma. Una breve, ma esatta descrizione dell' Anno Santo. Gio: Lorenzo Barbilanti. Roma, 『現存』、古今ローマの最も記念すべき事柄の論文、低浮彫の註釈や、教会、宮殿、庭園の資料のついた碑文およびそれらを飾る彫像、ならびにただ至上の教皇によってのみ執り行われる主要な儀式、フラス*

カーティ、ティヴォリ、アルバーノ、ヴェネレトリ、カブラローラの楽しみと、ならびにそこに見られる古代の事物、テヴェレ川、アニーネ川、ローマにある全ての水源、短いが、聖なる年の正確な記述」

- 2 (第一版) 1700. Giacomo PINAROLO. *Trattato delle cose più memorabili di Roma, tanto antiche, come moderne con l'enditioni di alcune statue, e bassi rilievi, palazzi, chiese ... di detta città, etc.*, Antonio de Rossi. Roma, (第二版) 1703. Giacomo PINAROLO. *L'Antichità di Roma con le cose più memorabili che in essa di presente, antiche e moderne si trovano ...*, A. de Rossi. Roma, (第三版) 1713. Giacomo PINAROLO. *L'Antichità di Roma con le cose più memorabili Tanto antiche, che moderne. Aggiuntivi le Spiegazioni di bassi rilievi, e Inscrizioni, che sono nelle Chiese, Palazzi, e Giardini, e i diparti delle Ville fuori di essa Città, con quanto in essa di raro si osserva. L'origine di fiumi Tevere, & Aniene.*, Gaetano Capranica. Roma.
- 3 1989. Patrizio BARBIERI. "Cembalato, organaro, chitarrao e fabbricatore di corde armoniche nella Polyanthea tecnica di Pinaroli (1718-32)...". *Reverare*, vol. 1, pp. 123-209.
- 4 1972. Enzo ESPOSITO. *Amici di Antonio De Rossi. Stampatore in Roma (1965-1755)*, Olschki. Firenze, p. XV.
- 5 以下の論文が、ドイツの人文主義者ヘルマン・フオン・トム・フンツ (Hermann von dem BUSCHE, 1468-1534) が「皆の友人」を意味する Paspiphilus の名を持つ「パトリオ」を指摘する。2020. Juliette GROENLAND. "Poetical Poetry and the Making of a Humanist School". Judith KESSLER, et al. ed. *Controversial Poetry 1400-1625*. Leiden. Boston. Brill, pp. 213-230.
- 6 *Lettera scritta da GIO: PIETRO PINAROLI Ad un suo Amico per la quale non dimostrata la nobiltà, & eccellenza dello studio delle Medaglie Antiche coi suoi giusti prezzi, e quanto le medesime possono pagarsi per formare una erudita Serie. DEDICATA ALL'ILLmo, e Rmo Signore MONSIGNOR ANTONIO BANCHIERI Referendario dell'una e l'altra Segreteria, Pronotorio Apostolico, Governator di Roma e Vice Camerlengo.*
- 7 1992. 小佐野重利「記憶の中の古代ローマサン美術に見られる古代の受容」中央公論美術出版
- 8 1991. Maria FORMICA. *Dizionario Biografico degli Italiani*, vol. 39. "DE ROSSI, Antonio Angelo". [https://www.treccani.it/enciclopedia/de-rossi-antonio-angelo\\_%28Dizionario-Biografico%29/](https://www.treccani.it/enciclopedia/de-rossi-antonio-angelo_%28Dizionario-Biografico%29/)



**本の窓**  
 公益財団法人日本博物館協会編  
 『改訂版 博物館資料取扱いガイドブック』  
 きょうせい 二〇一六年

副題にもある通り、「文化財、美術品等梱包・輸送の手引き」です。「美術品の取扱いの基礎知識」に始まり、陶磁器、刀剣、額装作品、掛画、巻子、屏風、等々、さらには甲冑や自然史標本、民俗・民族資料に至るまで、取扱いや梱包の仕方を解説してあります。美術館や博物館の職員、梱包輸送業者に向けて書かれた教科書としての性格が強いです。少々そっけない、或いは堅苦しい感じがするかもしれませんが、こ「一読頂ければ「こんなに色々気にならなくてもいいのか」と思っ頂けるのでは。「靴下は常に清潔なものを着用する」なんていう注意、笑ってしまうかもしれませんが、何故重要なのかは、読んで頂ければ分かります。お勧めします。

(上席学芸員 新田建史)

# 東海道中膝栗毛

主任学芸員 喜多孝臣

この四月に学芸課に着任した喜多孝臣と申します。どうぞよろしくお願いたします。

これまで奈良と東京にそれぞれおよそ二〇年ずつ住み、本年二月末から静岡に移り住み始めました。ここでの生活も半年以上経過したとはいえ、まだまだ慣れないことはかりで、長く住んでいる人たちにとっては当たり前地名を読むのさえ一苦労。夕暮れにうっかり目的地を通らない路線バスに乗ってしまったのは、景色が違うことに気づけず遠くに運ばれてしまい、今何処にいるのかもわからず途方に暮れたということもありました。「弥次さん」不在の「喜多さん」でも、東海道では珍道中を繰り広げるのが宿命のようです。

困ることばかりではありません。ここで働きたてから、ささやかながら自分にとって新しい発見が幾つもあり心躍らせています。当館学芸課OBの立花義彰氏による静岡近代美術史の研究から、かねてより関心のあ



龍華寺にある高山樗牛の墓

った日本の洋風額縁縁造業の創始者、長尾建吉が静岡市出身であり、郷里の美術振興のため明治時代より静岡の展覧会活動に携わっていたことを知ることができました。長尾はいわば当館の先達。ますます関心が募ります。静岡の近代史に思いを馳せる出会いもありました。類まれなる個性を持った思想家大杉栄の墓は静岡市内沓谷霊園にあるのですね。たまたま知って、墓前に手を合わせることもできました。一九二五年に建てられたこのコンクリート製のお墓はアール・デコ調という指摘がありますが、それもうなずける幾何学的装飾が施されています。また、静岡ゆかりの画家曾宮一念が受賞した樗牛賞にその名を冠する文学者高山樗牛のお墓も市内の龍華寺にありました。こちらのお墓には彫刻家朝倉丈夫の手による胸像が据えられていました。

これからここでどんな人やモノとの出会いがあるのか。いつまでも珍道中を繰り広げばかりでは困りますが、新たな出会いに驚き、そこから自分なりの発見を続けるためには、妙に慣れてしまうのでなく野次馬精神で動き回って顔を突き出すことも大事なような気がします。静岡から日本近代美術のうしろとを眺め、新鮮な驚きを皆さんと共有していきたいよう、「弥次さん」ならぬ「野次馬さん」を相棒に仕事に励みたいと思っています。

## ロダンウィーク 2022

11月3日(木・祝)～11月6日(日)

### 丘の上のロダンマルシェ

11月3日(木・祝) 11:00～16:00

### 友の会ひろば

11月3日(木・祝) 10:00～15:00

### 絶景クイズラリー

完走した方には先着でプレゼントあり

11月3日(木・祝) 11:00～15:00

### 「静岡の名手たち」ロダン賞コンサート

11月3日(木・祝) 15:00～

### ちょこっと体験講座 ミニ考える人づくり

11月3日(木・祝)～11月6日(日)

各日10:00～12:00/13:00～15:30

### ロダン館コンサート

リコーダーとサクソフォンでめぐるフランス300年の旅

11月5日(土) 14:00～

### 収蔵品展「絶景考Ⅱ」関連講座

農村を描く印象派画家 一カミーユ・ピサロとポントワーズ

11月6日(日) 11:00～

※イベント内容、開催日時は、いずれも予定であり、変更となる場合があります。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)

休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

## アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767

学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



## 静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 友の会のご案内

入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。